

日中戦争日記

村田和志郎

第六卷 警備戦中

京政府
重慶を臨時首都と

口長沙に各部分散

鵬和出版

神速軍に茫然

杭州

北平

抗戦

廣二千人に上る

茫然

茫然

日中戦争日記

第六卷 警備戦 中

村田和志郎



鵬和出版

著者略歴



村田和志郎（むらた・わしろう）

明治三十六年十月

大正十二年三月

昭和三年三月

昭和五年三月

昭和五年十一月

昭和十二年九月

昭和十三年六月

昭和十五年四月

昭和十九年二月

昭和二十年三月

昭和二十年八月

福岡県嘉穂郡碓井村生まれ

福岡県立嘉穂中学校卒業

明治大学法学部独法科卒業

陸軍幹部候補生

陸軍歩兵伍長（予備役編入）

召集、歩兵第二百二十四聯隊所属

陸軍歩兵軍曹

召集解除

臨時召集（将第一四六一部隊、

造第一一四〇部隊、隼第一六六

六七部隊等に所属）

陸軍曹長

現地召集解除

日中戦争日記

第六巻

昭和六十一年七月十日

初版発行

定価千五百円

著者 村田和志郎
編者 宇都宮泰長

発行者 竹内 洋

発行所 鵬 和 出 版

東京都目黒区八雲五十一一〇一号
電話（〇三）七一一四三三六代
振替口座 東京 八一四九六一九番

印刷・製本 仁科印刷有限公司

（落丁本・乱丁本はおとりかえいたしません）

ISBN4-89282-040-7

Printed in Japan

目次

昭和十四年

九月一日	朱村再訪	11
九月二日	反日壁書	31
九月三日	友軍誤射（白水和一等兵戦死）	40
九月十四日	石井部隊の噂	72
九月二十三日	警備出動、人質救出	90
九月二十七日	増城慰安所	99
十月六日	ガス煙教育	116
十月十四日	捕虜虐待	128
十月十九日	第百十四聯隊到着	138
十月二十日	移駐開始	141
十月二十一日	麦地（中山大学工学院）到着	148

十月二十八日	ガス煙教育……………	156
十一月十七日	映画館の抗日壁書……………	177
十一月二十九日	宣撫出動……………	191
十一月三十日	朝鮮人慰安婦……………	193
十二月七日	警備出動、家屋打ち壊し……………	203
十二月九日	出動準備……………	206
十二月二十日	食料徴発隊……………	225
十二月二十一日	マラリヤで入院……………	233
十二月二十六日	支那人の徴用……………	241
十二月三十日	病院警備隊……………	248
十二月三十一日	越年準備……………	249

装丁・構成 宇都宮泰長

◇第一卷 目次（内容）

昭和十二年

九月 召集

入営

十月 門司乗船・出港

富江港入港

富江島見聞記

富江港出港・佐世保入港

佐世保出港

十一月 杭州湾上陸

楓涇鎮附近の戦闘

楓涇鎮における戦闘詳報

嘉善附近の戦闘

嘉興附近の戦闘

嘉興入城

八里店における捕虜虐殺

十一月 湖州地区警備

朝鮮人慰安婦

十二月 湖州出発

漂陽より反転、宜興・長興へ

富陽附近の戦闘

昭和十三年

一月 杭州入城

師団主催慰霊祭

賀陽宮入来

慰安婦配当

慰安所開業

◇第二卷 目次

昭和十三年

二月 湖州に再入城

討伐戦闘日誌

掃蕩戦闘概要

湖州帰營

三月 生首随想

遺骨搜索

四月 小界部隊長離隊

五月 李家巷の戦闘

呂山と紅溪鎮確保

兵員損耗状況

六月 日本ビル開店

不祥事件発生

七月 湖州出発

杭州再入城

杭州出発、上海へ

抗日秘密テロ団

八月 竺家橋籠城

討伐出動

江湾兵舎へ移動

九月 大上陸演習

軍情報

遺骨箱準備

輸送船大破

上海碼頭へ

◇第三卷 目次

昭和十三年

十月 乗船

吳淞沖へ出航

バイヤス湾上陸

伝単「親愛証」

広東入城

伝単「日本農民大衆ニ告グ」

広東市内掃蕩

広東郊外出発、燕唐へ

熱発

十一月 蚊帳徴発

三名行方不明

シャーリ・テンブル写真入手

捕虜九名の顚末記

討伐行

捕虜銃殺

十二月 新塘宿営

旅団長来塘

聖旨伝達

朱村移転

猷納毛布

大晦日

昭和十四年

一月 拝賀式

一月 参謀巡視

工兵隊陣地構築

良民証発給

◇第四卷 目次

昭和十四年

二月 工兵隊広東へ引き上げ

朱村、嫁入り見物

郷土出身慰問団来訪

討伐準備

討伐出動

木下部隊長病死

宣撫工作

南支皇軍慰問団

三月 増城へ移駐

墜落海軍機

三月 抗日文書

ビー移転

四月 初年兵の戦死

敵襲

広東人の観察

緊急出動

捕虜（少年兵）

中国女性の惨殺死体

五月 日本軍捕虜秘話

捕虜斬殺

友軍相撃ち

掃蕩戦

逃亡兵

こんな兵隊

日本人慰安婦

忠勇美談集

◇第五卷目次

六月 田部大尉以下六柱、遺骨出発

宣撫班出動

うなされた者

偵察行

夢

高官毒殺（師団会報）

代議士の戦場視察

捕虜追放

七月 緊急出動

増城より蛇頭嶺へ移駐

朱村再訪

掃蕩出動

アメリカ赤痢により隔離

将校拉致される

八月

再度発熱

補充兵配属

敵機飛来

捕虜の告白

慰安所新設

敵、毒ガス使用

高射砲隊、奇襲される

友軍機誤射

竹槍部隊

掃蕩出動

日中戦争日記

第六卷

凡例

一、本書（第六卷）は、便箋百五十四枚（一枚平均三十四行、一行四十二字）に記した昭和十四年九月一日より同年十二月三十一日までの日記の全文である。

一、内容については、あまりにも個人的な公表をばかられる箇所は削除した。

一、仮名づかいについては現代仮名づかに改めたが、文脈から原文のままにしたところもある。

一、誤字脱字、誤記の明らかなものは訂正し、漢字についても現代風に改めた部分がある。（ ）内は戦後、説明として追加したものである。

一、時刻については表記を漢字（午後五時とか一七〇〇など）にした。ただし、引用文についてはそのまま記した部分がある。

一、部隊記号、部隊符号については文字で表記することに統一した。

一、本書の校正・校閲については、編者・宇都宮泰長の責任において厳正に実施した。

昭和十四年

九月一日 晴

ビールを飲んで寝たのが十一時、命令伝達に伝令の平山は休む暇もなく終日働いてくれた。ぐっすり眠ったとみえたが小用を催して起きる。月はいよいよ冴え渡り、屋外大樹の下に点々と眠っている。自分達は蚊も少なくゆっくり眠る事が出来た。二度も起きた。二度目は本道にトラックの走る音を聞いた。

七時半、起床。水牛がクリークの端に銅像のように立っている。緑がすっかり濃くなった。我々がここに駐留していたのは十二月（昨年）から三月初め迄であったが、あの頃に比べて著しく緑が濃くなり、道は草におおわれて見違えるようになり、桧などもよく茂り合って、その枯枝を燃やして暖をとった一月頃とは大変な違いである。常夏であり、何時も新緑に輝くこの南支でも八、九月は更に緑が濃くなるものだ。池など水草が茂り合って陸地続きのようにさえ思われる。

三月、バナナの花が咲いていた。バナナがもうすっかり大きな実をつけている。度々このバナナの前で幾人かの兵隊が写真をとっていたバナナである。

顔を洗いに裏に出ると行きつけの家に行く。娘も母親も喜んだ。母親は目の見えぬ明きめくらだが、娘が知らせたとみえて眼は見えぬけれども言つて喜ぶ。そこへ父親が帰つて来て又喜んだ。椅子を庭先に出してくれたので、腰を下ろして歯磨きにかかる。すると息子も帰つて来、隣の妻君も顔を出した。皆、顔見知りであるが七カ月も会わずにいたわけである。井戸端の妻君も二人の子供を養つて徴発軍人の夫の帰りを待っている。

蛇頭嶺も増城も遠望の美がない。朱村は平地にあるので遠望が利き朝夕が又となくいい。伊藤軍曹、樋口伍長などと散策したものであるが、朝の朱村、夕方の朱村、何れもいい。山に旭が上がり、夕方太陽が西山に没しようとする時なかなか捨て難い。大原野ではなく、しかもそれは日本の田舎のような山野の配置であるところから、益々したわしいものとなる。

一、当面ノ敵ハ四月作戰ヨリモ真剣ニシテ且ツ兵力多シ。我カ師団正面ニハ敵主力アリ、世界ノ大局ヨリ觀察スルニコノ度ノ作戰カ終リトナルヤモ知レス、故ニ大イニ奮斗ヲ希望ス。

二、軍隊区分（略）

三、前衛（軍序列略）

今朝八時三十分、前衛命令、第二大隊命令が出て、烏抗木の大樹の陰に旭をさけて筆記。屋外というものはすがすがしいものだ。屋内は裸では少し涼しすぎる。夜明けは毛布がないと少し寒い。

中隊へ行くとビールを飲めというわけで、有岡、塚本上等兵に飲まされる。朝から頬を赤く染める。持参のウイスキーは口を切る時がない。帰ると朝食が待っていた。平山が作ってくれた芋と牛缶とでいい味がついている。九時半、朝日のサンサンと照り光を浴びて朝食。

朱村で可愛がっていた小孩を探しに行ってみたが、遊んでいない。気の強い五十女が相変わらず元気に働いていたので、小孩をつれて来いと言うと三つばかりの子供

をつれて来た。これではないと言うと、南方を指し頭を倒し手をやって寝ていると言う真似をする。何処かへ行ったものらしい。附近は屋根が落ちた家ばかりで壁だけが残っている。四月の羅作戦に敵が焼いたと説明する。サツマ芋の葉が少しとってあって白い花がついている。野菜代わりに食うのである。

二時に昼食を食う。鯛と豆の缶詰、運動量が少ない時は少食。准尉、「村田軍曹一人の言う事を聞いてさえすればいいぞ」と平山にいわれた。井上富三郎上等兵、「村田班長は大食ぞ」「そのつもりで米をうんと持って行け」と、相戸も同じ事と言ったという。

他中隊の者、皆いう、「痩せている。病後だから自重せよ」。しかし、自分は平気だ。行ける処迄行く。三十七歳でも二十五歳、二十三歳の者には負けぬぞ。痩せていてもまだ十五貫はあろう。十七貫二〇〇あったのだから。今は十六貫ないかなあ。病後を皆、心配してくれる。しかし平気だ。新しい土地がいい。新戦場がまたいい。(一四四五)カメラ、またいい日本刀、これが矢張りほしくなり、思い出される。

昼夕食兼用、平山一等兵がちゃんと用意してくれる。

平山は小柄で声も小さく元気がないけれど、なかなか熱心に伝令と炊事をやる兵隊